（子供の力：創刊號）

昭和三年十月三十日印刷納本（昭和三年十一月三日發行）第一卷 第一號

子供の力

みな様へ

子供の『教養』と云ふ仕事はこの世の中で最も大きな事業であると言つても過言ではございますまい又子供を愛するといふ事は同時に人類の成長と未來を期待する事であるとさへ言はれてゐます、隨つて新しい世紀を創造する源泉となる事も疑ふことの出來ない眞理だと思ひます。

『子供の力社』は少さいながらも斯うした使命を持つて萬分の一の力ともなりたい念願から產聲をあげて來たのでございました。

微力ながらも『子供の力』は責任ある皆さん方の味方となり又父兄方の親しい御相談相手になつて行くことでございませう。

最後に我が社の『子供の力』は理解ある母親が慈愛にみちた言葉で我が子に話しかけるやうな麗はしい情けを持つお友達でありたいと願つてゐることをお知り下さい。

昭和三年秋

子供の力社

奉公忠實
勉强規律

相見る二將軍
萬感胸にみつ

彰善慰撫
去華服膺

御見舞
叔父樣

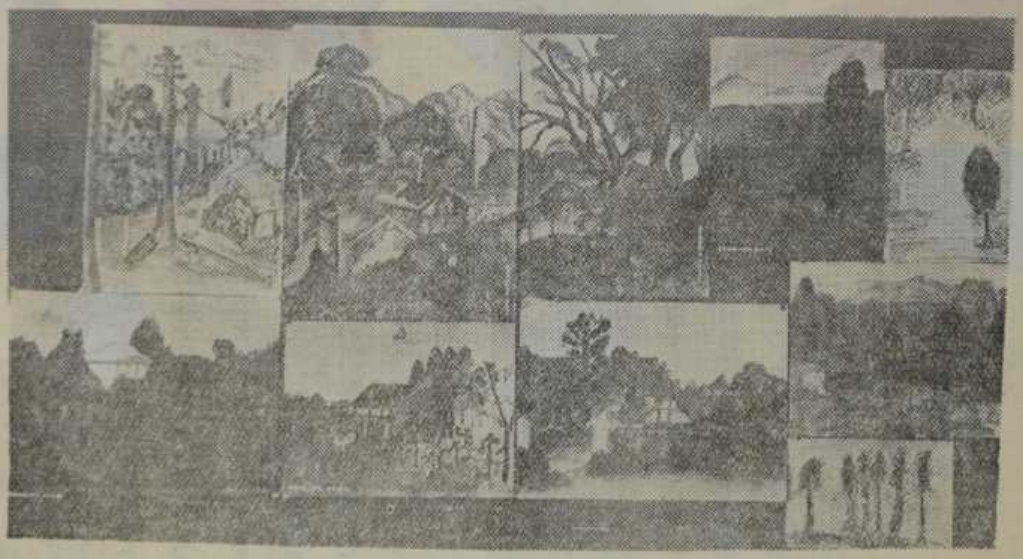
言記談
心息急

島津長曾我
部加藤蘇堂

四方東
西南北

諸國首府
都會視察

花卷小學校作品



花城小學校作品

目次

童謡 鹿踊りのはじまり　宮澤賢治
宮澤義治氏夫人 兄弟の仲の善さ
發刊の御挨拶　金澤秀次
童謡 二人の孤兒　高瀬幻二
體育デーを迎へて　上中小學校 晴山吉郎
見よ、この榮光
「子供の力社」に寄せられた感謝
童謡 越嶺峠　小田島柏龍
童謡について
玩具の船　土澤小學校 高橋芳夫
兒童文苑
本社賛助員芳名

童話

鹿踊りのはじまり

宮澤賢治

（上）

その時西のぎら〳〵のちぎれた雲のあひだから、夕陽は赤くなゝめに、苔の野原に注ぎ、すゝきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。

私は疲れてそこに眠りますと、ざあ〳〵吹いてゐた風が、だん〳〵人のことばに聞え、やがてそれは、今北上の山の方や、野原に行はれゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。

そこらがまだまるつきり丈高き草や黒い林のまゝだつたとき、嘉十はおぢいさんだちと北上川の東から移つて來て、

◇…小さな畑を…◇

開いて粟や稗をつくつてゐました。

あるとき嘉十は、粟の木から落ちて、少し左のひざを悪くしました。そんなときみんなはいつでも西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊つて療すのでした。

天氣のよい日に、嘉十も出かけて行きました。

糧と味噌と鍋とをしよつて、もう銀色の穂を出したすゝきの野原をすこしびつこを引きながら、ゆつくり〳〵歩いて行つたのです。

いつもの小流れや、石原をこえて、山脈のかたちも大きくはつきりなり、山の木も一本〳〵、すぎごけのやうに見わけらるゝところまで

◇…來たときは…◇

太陽はもうよほど西に外れて、十本ばかりの青いはんの木の木立の上に、少し青ざめてぎら〳〵光つてかゝりました。

嘉十は芝草の上に、せなかの荷物をどつかりおろして栃と粟とのだんごを出して食ひはじめました。すゝきは幾むらも幾むらも、はては野原一ぱいのやうに、まつ白に光つて波を立てました。嘉十はだんごを食べながらすゝきの中から黒くまつすぐに立つてゐる、はんの木の幹をじつにりつぱだと思ひました。

ところがあんまりいつしやうけんめいあるいたあとは、どうも何だかお腹が一ぱいのやうな氣がするのです。そこで嘉十も

◇…おしまひに…◇

栃のだんごを栃の實のくらゐ幾しました。

「こいづば鹿さ臭れべが、それ、鹿、來て喰」と嘉十はひとりごとのやうにいつて、それをうめばちさうの白い花の下におきました。それから荷物をまたしよつて、ゆつくり〳〵歩き出しました。

ところが少し行つたとき嘉十はさつきのやすんだところに、手拭を忘れて來たのに氣がつきましたので、急いでまたひつかへしました。あのはんの木の黒い木立がぢき近く見えてゐて、そこまで戻るくらゐ、なんのことでないやうでした。けれども嘉十はぴたりと立ちどまつてしまひました。それはたしかに

◇…鹿のけはひ…◇

がしたのです。鹿は少くとも五六疋、すめつぽいはなづらを、ずうつとのばして、しづかに歩いてゐるらしいのでした。

嘉十はすゝきにふれないやうに氣を付けながら、爪立てをして、そつと苔をふんでそつちの方へいきました。

たしかに鹿はさつきの栃の團子にやつてきたのでした。「はあ鹿等あ、すぐに來たもな。」と嘉十は咽喉の中で、笑ひながらつぶやきました。そしてからだをかゞめて、そろり〳〵と、そつちに近よつて行きました。

一むらのすゝきの陰から嘉十はちよつと

◇…顔を出して…◇

びつくりしてまたひつこ

めました。六疋ばかりの鹿が、さつきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環になつて廻つてゐるのでした。嘉十はすゝきの隙間から息をこらしてのぞきました。太陽が、ちようど一本のはんの木の頂にかゝつてゐましたので、その梢があやしく青く光り、まるで鹿の群を見下してぢつと立つてゐる青いいきものゝやうに思はれました。すゝきの穂も、一本づゝ銀色にかゞやき、鹿の毛並がことにその日はりつぱでした。

嘉十は喜んで、そつと片膝をついてそれに見とれました。

鹿は大きな環をつくつてぐるぐるぐるぐる廻つてゐましたが、よく見ると、どの鹿も

◇…環のまん中…◇

の方に氣がとられてゐるやうでした。その證據には、頭も耳も眼も、みんなそつちにむいて、おまけにたび〳〵、いかにも引つぱられるやうに、よろ〳〵と二足三足、環からはなれて、そつちに寄つていきさうにするのでした。

もちろんその環のまんなかには、さつきの嘉十の栃の團子がひとかけおいてあつたのでしたが、鹿どものしきりに氣にかけてあつたのは決して團子ではなくて、そのとなりの草の上にくの字になつて落ちてゐる、嘉十の白い手拭らしいのでした。

嘉十はいたい足をそつと手でまげて、苔の上にきちんと座りました、鹿のめぐりはだん〳〵ゆるやかになり、みんなは交る〴〵、前肢を一本環の中の方へ出して、今にも

◇…かけ出して…◇

いきさうにしては、びつくりしたやうに、また引つこめて、とつとつとつとつしづかに走るのでした。其の足音は氣もちよく野原の黒土の底の方までひびきました。

それから鹿どもは廻るのをやめてみんな手拭のこちらの方に來て立ちました。

嘉十はにはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがた〳〵ふるへました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな氣持が、波になつて傳はつて來たのでした。嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「じや、おれ行つて見て來べが。」

「うんにや、危ないじや、も少し見てべ。」

こんなことばも

◇…聞えました…◇

何時だか狐みたいに口發破などさかゝてあ、つまらないもな、高で栃の團子などでよ。」

「そだそだ全くだ。」

こんなことばもきゝました。

「生きものだがも知れないじやい。」

「うん、生きものらしいどこもあるな。」

こんなことばも聞えました。（つゞく）

子供の御相談

どなたでも、自分の子供については、かうしたならよからうか、あうしたなら惡いか、又かうしてもらひたいとか、あうしてもらひたいとか、又自分の子供はかういふ癖があるから、どうしたならよからうとかと色々學校に對して御相談をしたり御願をしたいことが、たくさんあることと思ひます。それを一々學校に行つて相談をしたり、御願をすることが、何となくおつくがる方もあれば、又急がはしいとか何とかで學校に行きかねるので思ひながら大事な〳〵御子樣の教育を粗末にして取返しのつかぬことゝなることが往々あるのです。

本紙は是等の御方々の爲めに、學校の方に御意見を取次いで上げ、唯に其の學校ばかりでなく、廣く他の學校の先生にまで御ききする樣にして出來るだけ皆樣の御子樣の教育のため御力添へを致しますから、どんな小さな問題でもどん〳〵本社宛御通信なさつて下さい、勿論無名でもなんでもかまひません。

◁教育參考▷

家庭訪問

（1）

宮澤善治氏夫人

兄弟の仲の善さ

自分ながらうれしい——

思ひ出の數々の話

花卷川口町の宮善といへば堅實な實業家として知られてをるが、現主宮澤善治翁は唯單に理財にかけての卓見手腕があるばかりでなく子弟の教養に就ても非常に注意され令息、令嬢、令孫がみな何れも秀才々媛揃であるといふことは定評通りで勿論之れはその生れつきが立派であることは爭はれぬ事實でありませうが其の教養宜しきを得たことも又與つて力があることゝ思ひます。

今回本紙の發行を機としかゝる名流家庭の教育方針の一端を窺ひ之れを一般に紹介することが出來るなれば、その裨益する所多大なるものがあらうと思ひ、一日記者は同家庭を訪づれたのでありました。定めし御當家ではかゝることを社會に公表されることは御迷惑至極と思はれるにちがひありませんが一般家庭の參考にと狂げて御許しを御願ひしたのでした。（一記者）

記者は、日頃業務に御精勵中の宮澤翁其の人を訪ねるのは頗な迷惑を御かけするといふ懸念と、も一つには裏面からおばあさん（翁の令夫人）の經驗談を伺ふのは或は却つて一般主婦の參考になるだらうと思ひ、特に御ばあさんを御訪ねしたのである。

記者は御ばあさんとは初めて御目にかゝつたのであるが如何にも無雜作に表裏のなささうな明い態度で快活に御話下されるので丸で舊知の人に接した樣な親しい氣分になつてしまつたのである

記者は御子さんや御孫さん達の小學校時代の成績を世評通りに御話して其の家庭の教育方針といつた樣なことをそれとなく御尋ねすると御ばあさんは

別にこれぞといつた考をもつて育てた譯でもなく、そんなに褒められては御笑止くつて御話が出來ません。たゞ子供等は小さい時分から兄弟仲がよかつたといふことだけは自分としては何にもかへられない面白いことで又仕合せなことゝ思つてゐました。今でも兄弟仲がよく何をするつても兄弟達は相談の上でする樣な工合であります然しかうなつたのも何も自分の育て方がよかつたの何のといふわけではなくみんなおぢいさん（善治翁の嚴父）の御かげであります。

或る時からしたことがありました。直治が小學校時代に八重畑の大竹さんと一二を爭ふ位成績がよかつたさうでそして大竹さんとは大の仲よしでありました。二人は小學校在學中から卒業したならば中等學校に一しよに行かうと堅く約束をしてをつたさうです。

愈々卒業となると大竹さんは中等學校に入學されたが、直治はおぢいさんに譯を話して入學を願つたら、御ぢいさんは立所に「なに自分等が大した學問もしないけれども兎に角一通りの讀み書き勘定も出來、人樣と同等な用も足せる。家に居る者はお前位の學問すれば十分である。決して

入學させぬ。」ときつぱり斷られてしまひました直治が非常に悲しみ且つくやしがつてそれをお父さん（善治翁）に頼んだり大津屋の伯父さんに頼んだりして、おぢいさんに御願したが矢張り聽かれない。直治は愈々悶え悲んだので、自分も本當にかあいさうでならなかつたが如何ともすることが出來ず、「何學校に入らなくとも學問が出來るんだ。な須川樣に御願して勉強したなら立派に學問が出來るんだから。」などゝ唯直治を慰めたり力づけたりして、とう〳〵一年といふもの泣き暮させました一年後には直治もやう〳〵入學のことは斷念めまして家業に手傳しながら家で學問することになりました。さあ次には恒治が小學校を卒業しました。矢張中學校に入りたいといひだしたので直治は「自分はおぢいさんのおつしやる通り中等學校には入りませんが恒治にばかりはどうぞ入學させて下さい」と折角おぢいさんに御願したらおぢいさんは「お前のことだけはをれがきめたが後の子供等のことは御父さんと相談してお前達できめろ。」と仰つしやつたので今度は直治が私共に相談をかけたので、其の結果恒治は入學させることにしました。それからその後の兄弟も本人の望みにまかせて學校に入れることにしたのでした。（つゞく）

發刊の御挨拶

『子供の力社』

金澤秀次

「力」のないところには勿論「ハタラキ」即ち活動なるものは生じて來ないが、縱令「力」があつても、其の「力」が減るとか、なくなれば從つて其の活動が減滅するのであるから、つまり「力」は活動の根源であります。子供には始めから「伸びる力」が自然に備つてをります。然し其の力を自然にまかせてほふつておくと、他から之れを培つて伸ばしてゆくとは、その結果に至つて大したちがひになります。恰度彼の草木が春に見舞はれて、あの暖い日光を浴び、あの乳のやうな春雨を吸ふて芽生え、そして日一日と伸びていくやうに、子供も其の小さいからだ、幼い心が絶えず伸びんとしてをり、そしてそれを手傳つてくれる他の何物かを要求して止みません。そこで此の伸びんとする「子供の力」を、どうすれば強く、大きく、立派に伸していくことが出來るかゝ、隨分大きな問題であります。なぜなれば、子供の力がうまく伸びて行けば、そこに立派な人物が出來上り、そしてその多數の集りは健全な社會と、健全な國家を築き上ぐることになるからであります。

この大きな問題を解決するには私共の考へとしては、此のひとりでに伸びんとする子供の力に、適當な資料と手入れをすることが最も必要なことゝ思ひます。如何に優良な草や木が芽え出ても、若し之れに肥料をやらなかつたら、到底その伸び行く力を充分に伸ばすことが出來ず、あたら名木名草もつまらぬ草木となり、果ては早く枯死するやうになります。又たとへ適當なこやしをやつても、手入れを怠つて、其周圍の雜木雜草を取拂はなかつたら、亦同樣な運命になるのであります。之れと同樣に子供の力も生れたまゝ、自然のまゝにしてほふつておいたなら、到底うまく伸びて行くものではありません。たとへ十の力をもつて生れた子供でも、五の力をも出し得ないといふことになるのであります。例へば、大臣とか大將とか、立派な學者とか藝術家とかに、なり得る心の力を持つて生れた者でも之れに教養といふ肥料若くは手入れをやら

なかつたならば、結局普通、甚だしきはコンマ以下の下積みになつて終らなければならぬことになります。又からだの力でいふならば、横綱といふ立派な角力になる体質をもつて生れても、之れが修練を積まなければ、亦なみ人で終らなければならぬことになります。反之、生れつき心の力に於ても、体の力に於ても弱くつとも、教養若くは修練を積めば、相當な人物、相當な角力にもなり得るのであります。要するに強い力をもつて生れた者を益々強く、弱い力をもつて生れた者でもだん〳〵強くさせて行くには、教養或は修練が第一であります。世の中には教育不能論などゝ、大裂裟な反旗をひるがへす者もあるが、私共はさうした人達の意中を了解するに苦しむ者であります。その人方は、強いて教育の可能なる事實を否定して人間の動物と異なる特長を呪ひ、そして教育的に之れまで進んで來た人類生活を、低級な動物的生活に逆轉せしめ、人間をして飽迄動物生活の悲哀を反覆せしめんとするものであると思ひます。故に私共はかゝる論者には一顧の必要も見ません。さりとて私共は決して教育萬能を高唱する者でもありません。唯教育は事實上或る程度迄は可能であるといふのであります。

そこで教育可能として其の教育の主体即ち教育する者は何であらう。私共は人間として地上の光を認めた者についてのみいふ、現在の教育學の原則による自然、社會家庭學校を以て之れにあてたいと思ひますが、自然及社會の教育に及ぼす影響は、今俄に如何とも打ち直すわけにはいきませんが、家庭及學校は現に直接に教育の主体として可能なるものと信ずる者であります。

かやうな意味に於て、學校と家庭とが教育の協調を圖ることが最も必要で、之れにより教育の効果は相俟つて顯著なるに至るべく、若し不幸にして兩者の協調を缺くときは、相互に教育を破壞することになるのであります。

本紙の目的は學校と家庭の一致を圖り進んでは或る程度まで自然及社會等の環境を整理調成し、以て伸びんとする子供の力を出來得る丈伸ばさうとするところにあるのであります。

「子供」の力なる本紙の名稱は此の目的此の内容を括り上げて付けたもので、どこまでも子供を本位に、子供は自分自身で内の方から其の力を伸ばしてをるがそれと同時に外の方からもその發達を助け、相俟つて子供の力を出來るだけ強く大きくせんとするを意味したことを、卷頭に明かにしておきます。

尚本紙はかやうな目的と名前を以て、教師と家庭(保護者)と子供のために遣られた世界でありますから、相共に自由に遠慮なく利用せられんことを切にお願ひしておきます。

童話　二人の孤兒

高涯幻二

…△第一回▽…

十一月もなかば過ぎて冷たい風が吹きはじめました。

ずつと昔、お城下だつた一本徑の街は、九時をうつと、もうどこの家でも戸を閉めて、眠につくのでした。

「寒むな、まるで冬だぢや、」

と晃はひとり言のやうに呟やいて、空を見上げました。空には月が名刀のやうに冷たく、さわつたらどんなものでも、真二ッに切れさうに、青く澄んでおります。

かわいさうに、晃はみなし見でした。廣い世の中に親もない、兄弟もない、たつた一人の少年だつたのです。

ここで可哀想な晃の身の上をお話しいたしませう。

晃のお父さんは旅から旅を續けて行く手品師だつたのです。晃も又お父さんと一緒に知らない町から知らない町へと渡らなければなりませんでし

た。どこへ行つても、晃にはお友達がありませんでした。三日でも四日でもお友達をつくらうと力めたのでしたが、方々の國を廻つて歩くために、どこの子供のお父さんもお母さんも、いろいろの考へから、晃と遊ばさせなかつたのです。

晃は、安宿のむさ苦しい部屋に、お父さんと一緒に寝ながら夜中にシクシク泣いてばかりゐたのです。

「晃、晃や、どうして泣くんだ。」

そう云つてお父さんはやさしく頭をなでて、いたはりました。

「源ちやや、勘ちやのお母ちやんは、晃と遊ぶなつて、言ふんだよ……」

やさしいお父さんの胸に、ポトポト涙を落してうらめしそうに訴へるのでした。

お父さんは、その言葉をきくたびに、知らず〳〵に落ちて來る涙をそつと拭きながら云ふのでした。

「がまんするんだよ、友達がないたつてかまふものか、お父さんが晃の友達になるからなあ……」

その土地、その町で、近所の子供達に乞食乞食と笑はれたりして、五年といふ長い間、晃はお父さんと一緒に旅から旅を續けて去年北の國のこの町に着いたのです。

丁度冬でした。毎日のやうに雪降りで、街には人通りもすくなく、吹雪の時などは、晝でさへもどこの家でも戸を閉めておりました。ですから街で手品をやつてゐても、一人も見に集つてきては呉れませんでした。晃はお父さんと一緒に雪に打たれ、寒さにふるへながらぼんやりと町角に立つてゐる日が、幾日となく續いたのです。

そのやうな日が續いたのですから、お金の貰ひもすくなく、働いて少しばかり溜めたお金も、もうほとんど使つてしまつたのでした。それにお父さんはたいへん躰が弱つておりました。何にかにつけて無理ばかりして來たのですから、弱い躰を雪の中に立つてゐたり、生活のことで始終心をいためたりしたために、十日目には、もう働けなくなつて、床についてしまひました。熱も四十度以上にあがつて、三日苦しみ通し、泣き叫ぶ晃のからだをしつかり抱いて、遠い旅の安宿の人達に看取れながら、はかなく息を引取つたのです。

その時、晃の十二の齢は暮れかかつてゐました力と頼むお父さんに死に別れた晃は、これからどうして廣い世の中を生きていつたらいいでせう。

外の家のお葬式ならば奇麗な花を持つたり、たくさんの御見送の人達に守られるのですが、晃のお父さんは、宿のお神さんと、泊つてゐた血色の悪い勞働者二三人に送られて、みんなのお墓とはずつと離れた隅に埋められたのでした。

あれ程ひどい苦しみをお醫者さんにもかけられなかつたり、そのやうなお葬式だつたりした事を晃は大きくなつても忘れてはならないと思ひました。三年前のことを思出しては、晃は一人納屋の隅で、口惜しくて泣いてばかりゐました。そして大きくなつたら、キツト偉い人間になつて立派にお父さんの魂を祭らうと死んだお父さんに、泣き泣き誓つたのです。

晃は、父の死んだ後近所の鍛冶屋に働いてゐた晃は初めのうちは、その主人やお神さんからも可哀想だといつて、親切に世話をされてゐたのですが、日は經つにしたがつて、何にかにつけて晃に辛く當りました。

「まぬけ！しつかりしろ。」

このやうな荒々しい言葉が、毎日のやうに、まだ幼ない晃に鎚のやうにガンガン響くのでした。鎚の上げやうが悪い、下げやうが悪い遅い、早いといつては、そのたびに鬼のやうな大きな眞黒な手が、青白い晃の頬に飛んだのです。晃の躰には文字通り傷の絶え間がない程でした。晃は自分の寝床である納屋に寝ながら悲しい涙に濡れたことが幾度あつたか知れませんでした。然し死んだお父さんの事を考へては、我慢をして、いやなその日その日を過して行つた

のでした。

お話は、ずつと前にもどります。

晃は夜更けた町を、家へ急いでゐました。

「寒む。」

さあつと冷たい風が、強く吹いて來ましたのでかういつて肩をすぼめました。その時着てゐる着物をみました。眞白な單衣でした。ひとへを着ていたら、ほんとうに冬のやうに寒いに違いないでせう。この時分にはひとへを着てゐる人達はもう無かつたのです。

晃は急ぎ足に、本通りに出ようと細道の角を曲らうとしました。その時塀の傍らに黑く動くものを見ました。

晃は生れつき大膽な少年でした。その瞬間は一足後にずつと下りましたが、人間である事を確かめると、安心したやうに傍に寄つて行きました。

「だれだ！、そこにゐるのあ、」

こう聲をかけてみましたが、低く云つたためか返事がありませんので、指で肩をつついてみました。

倒れてゐたのは、十歳ぐらひの少年でした。少年は力ない細い聲で、答へてのです。

「タ、タスケ、テ…。」

これだけしか云へないやうで、少しあげた頭をがくりと元のやうに下げてしまひました。

晃は、そのやうな事はたくさん見たり、又聞いたりして知つていましたので、きつと深い事情があるに違いないと思つたのでした。

「俺の家さ連れてぐべ。」

夢中でいつて、その少年を肩に寄りかからせて歩きだしました。家は直ぐ近くでした。やがて家の前まで來たときに、思ひ出したやうに肩の少年に氣がつきました。それまでは夢中だつたのですから、そして、その時、あの鬼のやうなボッボッアザの出來た主人の顏がまるで電光のやうに頭を走りました。

晃は、ハッと困つた顏をしましたが、笑顏とも泣顏ともつかない、ヘンな不思議な笑ひをしたのです。

晃は自分の寢床である納屋の中に、その少年を寢かし、薄い自分の布團をかけてやりました。

そして買つて置いたパンを二ッその少年に與へました。キットお腹が空いてゐるだらうと思ひましたから……。少年は眼で御禮をしながら、默つてパンを食ひはじめました。やつぱりお腹が空いてゐたのでせう……。

その晩二人は一ッの床に這入つて、仲よく眠りました。（つゞく）

…△第二回▽…

夜が明けると、その日は丁度年一ぺんの休みになつてゐました。主人の誕生日なのでした。その日の朝は、晃は特別に主人たちと一緒に膳に座つて朝飯をたべさせられました。晃は納屋にゐる嘉ちやんのことを心配しながら恐る〳〵箸を運びました。

さうさう、その少年は嘉樹といつて、晃より三ッ下の十二才の少年でした。朝飯がすむと主人夫婦は、町外れの親戚の家に遊びに出て行きました。その朝は久しぶりで三年前のときのやうに、やさしく晃に云ひました。

「今日は一日休んで、えゝからそらあたり、奇麗に掃除してげよ…。」

晃は、出て行つた主人たちを見送りながら、しめたぞ、しめたぞと飛上つて喜び、嬉しくてたまりませんでした。嘉ちやんを座敷に入れ、主人とお神さんだけしか使はないお膳を出して腹にはいるだけ二人は御飯を食べました。

主人は晃に少さなお茶椀に、二膳だけしか食べさせない程でしたから、歸つて來たらどれ程しかられるかは解つておりましたけれど、生れてから始めて友達をみつけた喜びとで、もう後はどうなつても構はないと思ひました。しかしお詫をしたらどうかして赦して呉れるだらうと思つたのでした。大切な人間の命を救つてやつたのですから…

「お蔭で助かつた。三日ばかりご飯を食はなかつたよ。」

嘉ちやんは、大人のやうな口ぶりで、應揚に笑ひました。

「遠慮しないで一ぱい食んだ。」

満足さうに食ひ終つた嘉ちやんをみながら晃はかう答へました。

納屋に歸つた嘉樹はポッポッ晃に身の上を語つて行きました。

嘉ちやんは、東京に近いところに生れました。何の不自由もなく親子三人は暮して行きました。嘉ちやんの三ッの時に、お父さんは病氣で亡くなられました。それからお母さんと二人で暮しをしてゐましたが、やつてゐたお母あさんの商賣が失敗して、故郷を離れなければなりませんでした。そしてやつぱり晃と同じやうに廻りあるいて北國のある町に到いたのです。

嘉樹が五ッの時、お母あさんが、町で流行つてゐた腸チフスに罹つて、嘉樹を殘して死んでしまひました。嘉樹は隣りの家に世話になることになりましたが、隣りの主人は惡人でした。十日ばかり經つて、あの賑やかな輕業團が、その町に來たのです。みなさんも知つてゐるでせう。祭などに奇麗なたくさんの女たちや、たくさんの男を連れてよく來るのを、可哀想に嘉樹は、世話になつてゐる惡い主人のために、その輕業に賣られてしまつたのでした。それからの嘉樹は、毎日泣いてばかりゐました。藝が出來ないといつては、恐はり顏をし監督が鞭で頭や躰をなぐりつけたり、一日ご飯を食はせられなかつたりして、長い間その輕業の中で暮して來たのです。

輕業の中には、やつぱり嘉樹と同じな境遇の人達が澤山おりました。その中に潮といふ可愛らしい女の子供がおりました。やつぱり賣られて來たのでした。嘉樹は十二になつて、女の子も十になりました。二人は一番仲のいいお友達でした。

その輕業の人達は、みんな亂暴な人ばかりでしたから、辛らさに堪え兼ねて時々その輕業の中から逃げやうとする人々もありました。ですから外へ出るにも一々嚴重に監視をつけたりしてゐました。

嘉樹の十三の時、何回かの興行が、お母あさんの死んだ北國のある町で打たれたのでした。二日目の夜中から恐しい暴風が町を包んだのです。その晩嘉樹と潮は、そつと宿屋の裏戸から抜け出しました。此處を逃げて、これからどうするといふ事も解つておりませんでしたけれど、たゞ鬼のやうな人達の中から、逃げたら、きつと何處かに自分達を救くつてれる、やさしい所があるだらうと思つてゐたのです。間もなく二三人の足音が、風の絶え間〳〵に、手をつないで走つてゐる二人の耳に聞こえて來ました。二人の逃げた事を知つて追かけて來たのでせう。

二人は夢中になつて、風の中を走りました。それから二十分も經つた頃嘉樹はハッとして傍らを見ましたが、潮の姿が見えませんでした。急いで後に行つたり、前に行つたりして、「潮ちやん、うしほちやん」と聲をかぎりに呼んで見ましたが返事はなく、風の音ばかりが、びゆう〳〵と空に鳴つてゐるだけでした。

此處まで話して來た嘉樹は、眼に一杯涙を溜めてゐました。

「可哀想だなあ、」

その時までぢつと聞いてゐた晃は、知らず知らず流れて來る涙をふいて云ひました。

「うしほちやんが可哀想だよ、つかまつたら大變だなあ！。」

ポッポッと膝の上に涙を落して、嘉樹は云ひました。

二人は、おたがひの身の上を、泣きながら話し合ひました。

納屋の窓から、遠く見える電氣柱に、ぽつかりと灯がつきました。

「晃!! 晃!!」

と云ふ聲がカンと晃の耳に響いて來ました。ひよりと頭をあげると、入口の所にポッポアザの出來た主人の顏が、まつかにふくれあがつてひつちを睨んでおりました

『しまつた』と晃は心の中で叫びました。嘉樹は俯むいて默つてゐます。晃を默つてゐました。

「こつちや來。ぐづ〳〵してゐいで。」

默つて返事をしないのをみると、前より一層强く怒鳴りつけました。それにあぐらをかいて座つてゐた事も、よほど主人の氣を損こねたらしいです。

晃は戸口から表へ一足歩み出した、その瞬間、自分の躰は土間の上へたたき出されました。

「あの人が、昨夜町さ倒れてゐただす、連れて來たのす。」

晃は半分泣き聲で云ひました。

「馬鹿!! 連れて來て、いつたが、それにこごらも汚なぐして。座敷さ何用あつてあがた。」

「どうが、ゆるして。」

晃は土に横はつて、涙のにじんで行く土の一所をみながら賴んだ。

「出でげ、貴樣みでいな盗人根生の奴あ、置ぐごと、出來ねい。」

「おぢさん、赦してやつて下さい。」

この時、納屋の中から走り出た嘉樹は、主人の前に立ちながら、おろおろ聲でいひました。

「こんがぎ!」

その聲と共に、嘉樹の躰は飛ばされて、晃の躰の上に、のしかかつてゐました。それからどれ程打たれるかは、二人には解りませんでした。寒い秋風に、二人は眼を開くと入口のところに投げ出されておりました。よほど夜も更けて、下を流れる川の音のみが、ザアー、ザアーと聞こえるばかりでした。

追ひ出された二人は、その後親切な人に拾はれて、學校にも入る事が出來て、二人とも偉い人になつたと言ふ事です。

そうそう、それから忘れてはならない事は、嘉樹と一緒に逃げだした潮ちやんは、あの晩通りあわせた親切なおぢさんに救はれて、やつぱり幸福に暮すことが出來たといふ話しです。

—(一九二八、十稿)—

『體育デー』を迎へて

上中小學校　晴山吉郎

季節の變り目には餘程氣をつけなければとんでもない病氣に見舞はれたり、寒さが强くなつてくると風邪にかゝつたり、二里か三里も歩くと疲れて一歩も歩かれない樣になつたりすることは餘り珍らしい事ではない。しかし風邪にかゝるとか、遠足のために足が疲れた位では誰も何んとも思はない。あまり平氣過きた事だから、重い病に罹つて一週間も二週間も續けて學校でも休むと今度は心配をはじめる、學校にも早く行つて見たくなる、近所の友達とも遊んで見たくなる、うちの人達も心配してゐる、何んとかして早く治したいものだ、治つてくれゝばよいと、毎日の樣に醫者に聞いて見たり、神樣にお願して見たり、おかげで治つたと喜ぶものゝ病氣した体はもとの体とは同じではない、体操の時間にも無理をすると具合が悪くなる、樂しい遠足があつても行かれない、勿論運動會などにはみんなの樣に元氣よく運動する事は出來ない、つまらないなあとがつかりして仕舞ふ。一体病氣は何時自分にとりつくか誰も知つた人は一人もない、そして誰にでもとりつくか、それもまた知つた事でもないが、とりつかれる人と、かゝらぬ人と二種あることはよくわかることです。

丈夫でない人は病氣にすぐとりつかれるし、丈夫な人はとりつかれないのです。おいしい御馳走をたべると丈夫になるか、お菓子でも毎日たべたら丈夫になるか、養生になるものをたべたら丈夫になるか、それも大事な事ですけれども、それだけでは丈夫にはなれません。肥ては來ますけれども肥える事と丈夫といふ事は別な事です。肥えてゐるから丈夫だとはいはれないのです丈夫になるには食物には注意をしなければならないのは勿論でありますが、体をよく使はなければならないのです。運動をしなければならないのです。体をよく使へばはじめて丈夫な身体とすることが出來るのです。丈夫な体を得ては病氣などにかゝらんで、毎日元氣で學校へ行くことが出來るのです。

皆さん考へて下さい。みんな弱いからだを持つたらどうでせう。誰が働くのです。働かなければ食ふことが出來ないで死なゝ

ければなりません。それは自分だけの事ですが、國の爲に働くことも、天皇陛下に忠義をつくすことも、お父さんやお母さんに孝行をすることも出來ますか。丈夫な身体を持つてこそ何んでも出來るのです。昔から『命あつての物種』と言つてゐますがその通りであります。

今日は第五回全國体育デーの當日であります。『体育デー』て何かと申しますと、日本國中に住んでゐる人々ならば町の人でも山の中の奥深い所にすんでゐる人でも、みんな身体に氣をつけて病氣などにはかゝらぬ丈夫な身体にしようではないかと申合せの日であります。それですから今日はどこの學校でも、運動會とか遠足とか、体操の會とか、その他体のためになる種々な會を開いてたのしく暮すのであります。

學校ばかりでなく青年團、女子青年團でもそれぞれの催しがあるのです。例年なれば全國の青年團、中等學校の運動會が東京で開かれるのですけれども、今年は御大禮がありますため何かとお忙はしため明治神宮の競技大會は開かないとの事であります。

みなさん、からだの丈夫な人となりませう。

× × ×

見よ、この榮光！

『子供の力社』に寄せられた

◇…讃辭、祝辭の雨…◇

花巻佛教少年團長
同　日曜學園長　佐藤大峰

金澤秀治さんが御見えになりまして、子供新聞を是非創めたいとおつしやつて、色々と御意見を拜聽させられたのは、丁度二ヶ月ばかり前だつたと思ひます。先日は又、赤坂さんの御來訪を頂きまして、色々と御高説を承りまして御趣旨やら、その内容やらを伺ひまして、誠に同感の次第であります。愈々此に第二の國民のために、雄々しくも孤々の聲をあげられた事を心から御祝ひ申上げます。

近頃教育の方針が極めて社會的に進出して參りまして、最近殊の外、子供さん達の教養啓蒙に力を注がれてきました事は誠に此上もない喜ばしい事でございます。

此の廣い大きい大自然の中に最も純眞に最も自由に何等の障碍もなく飛躍してをりますのは、本當に子供の世界だけでありませう。佛陀は菩薩を指して『童子』と仰せられたのも無理からぬ事であります。いさゝかの邪氣もなく少しの僞りもなく、天眞爛漫な心は、恰も寂寞の曠野をかざる紅葉の樣に、而も活氣横溢の姿であります。

今正に天高く馬肥ゆるのとき、生々として伸び上らんとしてをる子供さん達は、口には樂しい歌をうたひ、筆には本然淨裸の文を作り、自由遊化の樂園に幸をほしいまゝにするときであります。

『コドモの力』はこの樣な潑溂な、無邪氣な子供さんのための樂園として生れ、フレンドとして孤々の聲をあげたのでありませうどうぞして、子供さん達の社會的指導者として『子供の力』の日を追ふて強くなり、やがて我が郷土幼少の啓蒙の大任を双肩に擔ふて立たれん事を祝福いたしてやみません。

殊に本年は當地に於て、大演習が行はれおそれおふくも、聖上　の龍駕を奉迎したる光榮を擔ひました。我々國民にあつても、永く記念すべき芽出度い事でありました。この芽出度い儀を祝するために、意義ある記念事業を起し、皇室と共に、その慶福を享けたいと念願してゐました。計らずも、この好機會に遭遇した貴紙の誕生と彌榮へん事を祝します。

◇

小笠原政一

國民として、又個人として、其の將來をもつ子供の力を堅實に、豐富に育てようとする御社の今回の出版計畫を聞き、難多にして且つ無反省な讀物の多く發行される今日機を得たものと非常な欣びを以つて賛成するものであります。

其の趣意に於て、計畫に於て立派な社會教育事業と信じます。

途中挫折することなく永續されるならば子供にとつて眞に幸福なことでありませう。其の成功を希望し且つ期待する次第であります。

◇

土澤小學校　佐々木俊隨

教育のことは學校と家庭と社會が力を協せてやらねばならぬ。中にも家庭は教育の源泉である。世の父兄達多くは兒童の教育を學校に任せきりで學校にやつておきさへすれば安心だと思つてゐるが餘りに有りがた過ぎる。否な何たる暴言であらう。苟くも教育の目的を眞に人間を作るといふことに置くならば家庭と學校との相互において間髪を容れぬ程の信の上に立たねば達成さるるものでない。眞の教育は信の上においてのみ可能なりと云ひつべきだ。學校が家庭を疑ひ、家庭が學校を疑ふやうでは其の間に立て兒童は如何して立派な人間になり得やうか。之れ木に緣りて魚を求むる類かなである。實に家庭と學校の連絡は兒童教育上最も緊要なことである。然るに學校も家庭もこの點看過してゐるのではなからうが眞にこの緊要を感じて努力を拂ふてゐることの少きを慨嘆する。もつと學校當事者は積極的活動を圖るは勿論、父兄達も眞に教育の何物たるかを理解し家庭の改善を圖らねばならぬ。

同郷の士赤坂君夙にこの點に思を寄せ今回本紙の發刊を企てらる。而して本紙の世に出づる使命を聞くに如上の目的を高く世にがゝげて、教育第一を叫ばんとするのであると。誠に時弊救濟に稗益するところ少なからざるを思ひ、我が教育界のため慶賀に堪へない。本紙は飽くまで純眞と公正とを守り、この尊き使命を遂ぐべく伸びんことを希望して止まない。

◇

花巻高等女學校長　大泉重藏

此度御社より週刊『子供の力』を發行することゝ相成り、趣意書を拜見するに、家庭と小學校との連絡を圖る、時代要求の一福音にして、地方初等教育の爲め、双手を擧げて慶賀する所であります。從つて此の發刊により將來當地方の發展頗る大なるものあらんと信じます。

然るに事業は起し易く、之れを永遠に繼續するは、誠に至難なるものでありまして、或は怒濤の險あり、或は鰐魚の難あり、或は日暮れて途遠しと云ふ悲觀もなしとは保し難いのであります。故に今後大に奮勵努力、以て目的の彼岸に達せられんことを切望して止みません。

聊か卑見を述べて祝詞と致します。

◇

菊池宗憲

草木の種子の本質は種子そのものでなくて、芽を出し、葉を生じ、花を咲かせ、實を結ぶのが自然の力であり、種子本來の質である。本來の質に從つて善き花を咲かせ樣と努めても、嫌な雜草が次ぎ次ぎに生えて來て、よき花を咲かせないとする。人の心にも人の社會にも恁ふしたことは珍らしい事ではない。だが、花そのものは咲く性を持つて居る。雜草も亦生える自然の性を持つて居る。それならば質自然の儘でよいかと思ふと必ずしもさうばかりは斷定されない。野薔薇を大切に培ひドッサリ肥料をしても咲く花は矢張り野バラの花だ。それを質のよいバラを接木すると臺木である野バラの花は咲かないで接木の美しい花が咲く、よき指導、よき教育は本性を美化し、善化する、此の意味に於て初等教育を禮讃し、『子供の力』の創刊を禮讃したい。

◇

花巻　多寡生

赤坂君頃者初等教育の刷新徹底を標榜して教師、家庭、兒童の聯絡の爲めに之れが機關紙の發刊を企劃せらる。誠に地方の新しき試みとして又將に時弊を脱却せんとする社會の要求として吾人の双手を擧げて歡迎を惜まざる所の者である。

赤坂君は人格の人である。這般某新聞を退

き、茲に造詣淺からざる初等教育界の爲めに全幅の經綸を行はんとす。實に自知の明ありと云ふべく、又適所適材の按配として地方教育界の近來の快心事として祝福すべきであると思ふ。必ずや君が半生の蘊蓄と其の人格の發露とは斯界の巨鐘として時弊の曉夢を破るべく、吾人は多大の期待と翹望とを以て其の前途を囑する者である。

由來初等教育界に敎ける學校と家庭との連絡については耳に章魚の問題である。然るに是れは學校側の常に言ふ家庭に學校を知らしむるといふことよりは吾人は反對に寧ろ學校の敎師諸君にも少し地方の家庭的知識を徹底せしむるの必要がなからうか。そして之れが反映的敎育を兒童に學ぶべく一つ研究工夫することが現下の初等敎育として最も緊急の事ではないかと思ふ。

吾人は敎育上に就ては門外漢であるが、平素所懷の一端を大演習多忙裡ではあるがこの機會に一言申して諸賢の一考を望む次第である。

◇

花卷農學校長　中野新左久

皆樣の御承知の通り私共の天職は、如何にすればよい農作物や家畜を育て上ぐることが出來るかを理論と實際とから能く研究しそれを生徒達に敎へて、よい農業家を育て上ぐる所にあるのであります。

農家が春種を播いてから、秋になり立派な收穫を得るまでには、容易な心配や苦勞ではありません。芽生えたまゝでおけば、充分暢びる所までのび得ないのです。よくのばすにはその周圍に生えた雜草も取去らねばなりません。それ相當な肥料もやり、その肥料を食ひ易くもしてやり、多い少いもないやうにしてやり、雨の日も風の日も常に見舞つてやり、そして出來るだけ作物が成育するやうにせねばなりません。子供もその通りでズン〳〵暢びゆく力は內から內からと湧いて來るが、是れを自然の儘にほふておくと、外部から色々なバチルスがやつて來て邪魔をひろげ暢びる所まで暢び得ないばかりか、或はとんでもない惡い方面に暢びるやうになります。子供の力は素々は純なものであります。之れを能く暢すも暢し得ないも、又之れを赤くするも黑くするも、學校、家庭、社會等、之れを培ふ環境の如何によることが多大であります。子供をよい環境におくと其の力は眞つ直ぐに强く太く立派に暢びて行くのであります。よい環境をつくるには家庭と學校とが互に手を握つて、社會自然其の他の環境を子供に適應するやうに努めねばなりません。かうしたところに敎育の眞價も生れて來るのであります。

私はかうした意味から今度發行される子供の力を眺むる場合、特に地方に立脚し活躍することを思ふ場合、衷心から其の發刊を祝福する者であります。

暢びんとする子供の力に幾多の障害がある如く、貴社の前途には必ずや幾多の難艱が横つてをることを覺悟せねばなりません。願くは子供のため、國家のため萬難を排して邁進し其の光輝ある大使命を達成せられんことを祈望して止みません

◇

花卷小學校　藤岡悅郎

此度貴社から『子供の力』が生れました事は敎育界の爲めに誠に目出度い事で、心から御祝申上げます。

これまでも隨分いろいろ敎育振興の爲めに發行された讀物が澤山出ましたが『子供の力』の樣に學校と家庭と子供とを鄕土的にしつくり結びつけて倶に共に敎育の向上發達を計らうとする樣な讀物は御紙を以て嚆矢とする樣に考へます。若しあつたかも知れませんが永續したものは少なかつたじやないかと思はれます。

申すまでもなく敎育の事業たるや百年の計でありまして中々一朝一夕にその効果を收むる事が出來ませんが從つて其經營なども中々容易な事じやないと存じます。

希くは貴社員各位の御奮鬪によつて國家敎育のため子供の力の長生する樣に祈つて祝辭に代へる次第でございます。

童話

越兼峠

小田島柏龍

昔、或所に大層慾の深いそして恐しいお婆さんがありました。このおばあさんは山のふもとに住んでゐました

ところが此の山は大そう大きくて、此の山を世間では越兼峠といつてどんな偉い武士でも、この峠をまんぞくに越した人はありませんでした。それに隣國に出るには、ぜひこの山を越えなければなりませんが、この峠を越えるには一日や半日では越えられませんから、誰でも山のふもとのおばあさんの家に泊るのでした

或る日二人の武士は隣りの國に撃剣の試合に加はゝる爲めに參りましたが夕方にもなつたので、この家に一泊することになりました。

武「頼まう、頼まう」婆「オウ、オウ、何誰樣デー。」

武「アノ今晩一夜の宿を頼みたいものだが」婆「オウ、オウ、サア、サア」お泊りなされといつた顔をよく見たら大そう恐ろしいお婆さんでした。

◇

えらい武士さんたちですから、そんなことは心配なく泊りました。

時はもう丑滿（午前二時ごろ）頃のことでした。今までぐつすり寝てゐたお婆さんは、ムク〳〵起き上つて、押入らしいところから、一振の大刀を取出して、スバリ〳〵とぎはじめました。「ドレ切れるかな。」ととぎたての大刀を髪にあてゝ見るのでした。

なるほど切れ味がよい。

「これで大丈夫だ、二人の首ぐらゐは、ウフフ……。」と凄い笑みを浮べながら二人の武士の寝床へと、足をミシリッ、ミシリッとはこばせました。

人の武士はこんなことゝは夢にも知りません。樂しい夢でも見てゐたことでせう。今に殺されるのも知らないで。

お婆さんは畫のつかれで前後を忘れてグッスリ寝込んでゐた武士ののどもとにズブーリ刺しました

一人の武士は「ムーン」ひとこゑのこしたまゝ死んでしまひました。

他の一人の武士はそんな「ムーン」ぐらゐなうなりごゑでは、目を覺しません。相變らずグウ〳〵寝込んでゐました。この武士ものどをズブーリと思ひの外「ぶれいものッ」と大喝一聲、刀に手をかけるが早いか、足をスッと拂ひました

◇

この鬼婆もさるもの、どこで撃剣をならつたものかポンと、足をあげてよけました。武士と鬼婆はしばらくの間、チャンバラ〳〵やつてゐたが、どうしたはづみか武士は過つて深いゐろりに足をふみはづしましたからたまりません。たちまちやけどしました。

鬼婆はこゝぞとすきをねらつて武士ののどにズブーッと刺しぬき離なく二人の武士を殺つてしまひました。「何んてい弱いさんぴんじゃ、ウフヽヽヽ。」凄い〳〵笑みをもらして武士等の寝床に入つていきました。

「ドレ〳〵お金はオウたんまりあるぞ、占めたッ。」と、

こんなおそろしいすごい婆でした。

そしてからしたことは何べんも〳〵も續いたのです。

◇

それから二三日たつてある夕暮方でした。

八九才にもならうか、可愛い〳〵一人の子供は訪づれました。

この子供は隣國に居るあてもない母をたづねて、遠い〳〵途を痛い足を引きづつて、やう〳〵こゝまでやつて來たのです。

何せ子供のことでもありしつかりつかれて、この峠へ上ることも出來ず鬼婆の家の前に立つたのでした。

子「お願ひです。」婆「オ……誰じゃ。」子「どうか今晩一晩だけとめて下さい。」婆「オヽサウカ〳〵とまれ〳〵。」とこゝろよくゆるして與れました。

子供は大そう喜んでこゝにとまることになりました。

婆「可愛い子じゃ、これからどこへゆく。」

鬼婆でもやつぱり可愛いと見える

子「ハイ隣國の母の所に行きます。」

婆「一人か」
子「ハイ一人です」
婆「隣國のどこらあたりだ。」
子「××の町です。」
婆「オウさうか、己れもその町におぼえた人がある。」（つゞく）

童謡について（1）

玩具の船

土澤小學校
高橋芳夫（審）

子供の力の誕生をお祝します。「子供の力」は皆樣や私達大人の心の故郷とでもいひませうか、私たちは心からこの可愛い「子供の力」の伸びて行くのをお祈りいたしませう。

—◇—

私は今、心の故郷に歸つて、親愛なる皆樣のことをおもひつゞけて居るのです。心の故郷それは皆樣のやうな樂しいといふ心持であり又さびしいといふ心持なんです。さうした心持を、そのまゝうたひ出すのは童謡ですね。心の故郷—お母さんのお乳が戀しく思ふそれなんですよ。でも私は大人なんだから、お母さんのお乳を呑みたいわけじやないのですよ。お母さんの胸に抱かれた幼い夢を見るのです。

玩具の船

雪の降る夜に
母さんの
ひざにもたれて
思ふこと
赤い帆かけた
玩具の船は
夏の川原に
忘れた船は
どこへ流れて

いつたやら

西條八十さんの童謡です、童謡の小父さんですから皆樣も知つてゐるでせう唱歌の時間にでも先生に教はつたことがあるでせう。うたの心持が分りますね。作者の心持が—う、たの調子なんかよく味はつてみて下さい。

雪の降る夜に
母さんの—

なつかしいうただと私は思ひます。私たちも幼い時お母さんに抱かれて色んなかあいゝ事を思ひ出したりした事があるでせう。玩具の船を持つて夏の川原で遊び戯むれたことを、雪の降るしづかな晩、お母さんのひざにもたれてぼんやり考へて居たんですね。夏の川原に忘れた船は、ほんとにどこへ流れて行つたのでせう。

皆樣にかうしたなつかしい思ひ出がなかつたでせうか。いやきつとあります。私たちはふだんぼんやりしてゐる時。は何んにも頭に浮んで來ないけど、いつか自分に歸ることがありますね。何かに夢中になつて居るか、さうでなければ、何んにも考へる事なしにぼんやりしてゐるとき、急に眼がさめたやうに、自分といふ者の姿をはつきり見凝めることがありますねその時です。色々のなつかしい思ひ出があつたり樣々な事を考へ込んだりするのは。

ある晩、お針をする年老ひた母をじつとみつめてゐましたら、私が五ッ位の時、お砂糖をねだつて泣いた事がひよいと思ひ浮んで來たのです。

黒砂糖
砂糖ほしさに
泣いたつけ
あん／＼／＼と
泣いたつけ
母さんせつせと
針仕ごと
うるさい子だねと
針しごと
だけども僕は
泣いたつけ
悲しそにして
泣いたつけ
母さんまけて
戸だなから
黒いお砂糖を
出したつけ
お砂糖なめ／＼
笑つたつけ
涙をふき／＼
なめたつけ
どうか笑つてやつて下さい。

静かな秋の夜です。學校の宿直室は私一人と電燈の明るさとだけです。今回は、玩具の船と題してこの一文を書きましたこれから度々書かしていたゞきます。では次に又お目にかゝりませう。

—（一〇二二夜）—

童見文苑

私のお寺

和賀郡輕井澤校　尋五　諏訪文英

私のお寺へ
のぼるには
小やぶつゞきの細い道
たまたまやさしい
せきれいが
ちゝん〳〵と鳴いてくる
私のお寺の
父さんは
お伽噺が上手だよ
夕やけ小やけの
空のいろ
お寺の障子が燃えてゐる

◇

ほゝづき

和賀郡輕井澤校　尋五　菊池レン

私のすきなほゝづきが今年もたくさんなりました。秋晴れのよい天氣にほゝづきかりに行つて見ましたら、まだうす赤いと思つてゐたほゝづきが、どれもみなすゞらんのやうなほゝづきに赤くきれいにじゆくしてほゝゑんでをりました。そのほゝづきのからをひらくたびに赤いしんじゆ色をしたほゝづきが、かほを出してゐました。私はほゝづきがほんたうにかはゆうございます。

◇

小猫が居ない

和賀郡輕井澤校　尋四　下坂ハル子

「今朝は小猫が見えない」と皆でさわいだのは四五日前の朝飯の時でした。きつと親猫が何所かへつれて行つたのだと、それからは毎日親猫のやうすを注意して見ました。その内にはつれて來るかもしれないといふことでしたがどうしてもつれて來ません。親猫の乳をしらべて見ましたら飲ませてゐるやうすです。親猫は夕方になると家の前の山に行くやうでした。昨日は親猫のあとを追つかけて行きますと猫はいがんでまるくなつてにげてしまひました。山を一生けん命探がして見ましたけれ共つひに見つけかねました。ほんたうに小猫はどこに行つたのでせう。こまつてしまひました。

◇

きのことり

和賀郡輕井澤校　尋二　菊池ノリ

きのふおねえさんと二人で、てるてるぼうずをながしたので、けふはよいお天氣でした。學校で三じかんならつてからせんせいにつれられて山へ行きました。たくさんきのこがあるだらうとおもつて行きますと、一つもありませんでしたので、いろいろなあそびをしてかへりました。

◇

姉の死

黒澤尻校　高一　赤平タマ

父は火びとの横ざに坐つて一政はもうたすからないんだ」。といかにも悲しさうな聲でいつた。私も悲しくなつて、涙がぽろ〳〵と出ました。母はごはん仕度をしてゐました「佛樣さおままあげろや」「はい」といつて私は佛樣と神樣にごはんを上げいね子といつしよにごはんを食べて學校に行く仕度をしてゐますと、父は「もしも今日にも死んだら知らせるから早く行けもう七時半になるぞ」。私はいね子を先にやつて父母に「いつて參ります」と言つて家を出た。歩きながらも行く先の事、姉が死んだらどうしたらよいだらう。父母はもう五十の年をこえて働くに不自由なんだし私と兄さんと二人で姉のかた見の子供たちをよい方にみちびかねばならない、などと一人考へて學校に行つた。學校に來ても一向勉强に氣がとられないで姉のことばかりに氣がとられてならなかつた。そして授業が三時間すぎておひるをたべて廊下に出ようとすると、そめちやんが來て「玉ちやん死んだど」といつてぞうりを前の方にすべらせながら言つた。私は何がなんだかわからなかつた。

「あらそれでえ先生にいつてけてなさ」。といつてかばんに道具を入れ、皆にさやうならをいつてはしごだんを下りて行くとだれだつたか忘れたが、「おひまか」と言つた。私は「あん」と答へると「なにして」「姉さんが死んで」「あらーこまるべー」といつた。このやうに五六人にきかれた。皆は元氣よく遊んでゐる樣子を見ると何んだか私だけさびしいやうでたまらなかつた。歩いてゐるうちに校舍のはじまでくると、てるちやんが、「たまつち

やんこまるべ」といつたが私は只かしらだけで言つて何も言へなかつた。すこしたつと哲子さんが稲子をつれて來た。「いね子が先生に言へないで居たからおれがいつてくれた」といつた。

私はいね子といつしよに歸つて來た、途中でいね子がすく〳〵と泣くのでつい私も涙がぽろ〳〵と出ました。それでも道を行き來する人に見られるとはずかしいので涙をふき〳〵いね子をなぐさめて家までやつて來ました家にはお父さんと兄さんと前のお父さんと三人で何か相談をしてゐました。お母さんはそこらあたりの物をかたつけてゐました。姉さんはふすまのかげになつて、前には机があつてろうそく、せんこう、お花、だんご等が上げてあつた。

私は姉はふすまのかげになつてゐるのか、なんたらなさけないこんな運命をもつたのだらう、かはいさうにあゝと心の中でかなしみがたくさんおきて來た。けれどもどうすることも出來ない。いね子は「あらあ今からはかゝちやんが死んだから、ばゞのいふことをきぐー」といつてなき出した。だん〳〵高い聲で悲しい聲で泣いたので私もそれに引かれ涙がぽろ〳〵と出ていくらふいても〳〵出て來た。

少したつてから板をはいて、消毒をして、それから障子にも消毒をしてから私たちもした。姉は惡い病氣にかゝつたからです。

姉は唯二枚ばかりの着物をきてゐた。便所や家も消毒した。向ひの家で姉さんにきせる着物をこしらへて居つた。大ていの人は「姉が死んでさびしかべー」。とか「いね子は二年生にもなつたからいいんだとも後の二人は五つと二つだもの、ぢんづばんばは、どんなにしてあつかふべーひでえがべな」等と口々にいつてくれました。

◇

お母さんの病氣

和賀郡立石校　尋五　多田誠

私のおかあさんはからだ弱いので時々病氣をなさいます、今年もひどい病氣で先月から花卷病院に行つてゐます。家には私と妹二人、おとうさんは夜お歸りになるだけですさびしいやら心配やらで學校に居てもぼんやりしてことがたび〳〵です。昨日はお休みなので花卷病院に妹と二人で行きました。汽車はずゐぶんこんで居ましたが、大人たちは立つて私どもを腰かけさせてくれました、晴山をでる時は九時十七分でした、花卷についたのは十時十七分でした、病院に行つて見るとおかあさんはちゆうしやをして居たところでした、まるでやせてくるしさうにして居ました。私たちは行つたのでおかあさんは寢かあさんをよくして下さればよいと思ひました。苦しさうなおかあさんの前でお菓子をたべてもさつぱりうまくなかつた、家の方のことを話して聞かせたりして終列車でかへりました。おかあさんを病院においておかあさんの居ないさびしい家に歸りました。おかあさんの病氣はいつになつたらおいしやさん達は早くおなほるでせう。

兒童短歌　秋

南城校　尋四　高橋德右衛門

夕ぐれにお寺のかねはごんとなる
からすカアカアないてかへる

×

竹やぶにすずめのこゑもきこえます
ヂンチンチンと秋の日よりに

×

學校のそばの松の木いつみても
玄くわんばんしてゐるやうだ

×

南城校　尋四　佐々木　勇

色づいた庭のかへでは美しく
さら〳〵ゆれておちるのもある。

×

音高く汽笛ならして鐵橋を
ゆふ風きつて汽車走りゆく。

×

すみきつた秋のお空を飛行機は
音いさましくとびまはるなり。

▽花城校作品△

◇

この頃あつたこと

尋三　朴澤謙一郎

私は床にねてゐると、だれだか戸をがたがた、たゝいた人がありましたので、私は「母さんだれかが戸をたゝいてゐるよ」といひますと、母さんがおきて戸をあけました。兵隊らしい人が「すこし休ませて下さい」といつて裏へきて戸をはづしました。時々兵隊さんたちは、あかりをつけるので兵隊さんたちのかげぼうしが障子にうつります。兵隊さんたちは、寒い寒いといつてねてゐます。まもなく、ぐうぐうといふいびきがきこえてきました。つかれてゐるのでせう。少し上つてゐるやうな兵隊さんが、お母さんに「今日で三晩ねませんからね」といひながら表へ行つてしまひましたねまきで外へでて見ますと、けんつけてつばうをもつた兵隊さんが番兵をしてゐます。

一時間もたゝないうちに「しゆつぱつ」といふごうれいがきこえました。皆起き上つてくらい外へ出てゆきました。

◇

へいたいごつこ

尋二　松島良雄

私たちのじんは、杉ばやしでした。そして私は中將です。すゝめ、すゝめとごうれいをかけてすすむのでした。

いさましくたたかひました。そしてからもどつて又すすんでたたかひました。そしてとうとう私たちの方がかちました。又一、二、三といつて、こんどはまけました。

なんくわいもしました。中々しやうぶがきまらないのでやめました。

◇

きのことり

尋二　上野九二男

私どもはきでのへ、きのことりにいきました。そしてあみのめをとつたりしてゐる中に、雨がふりさうになりましたので、家へかへらうとしてあるいてきますとはつたけがいつぱいありました。私は誰にも、みつからないやうにそつこ、そつこ、とみんなとつていきますと、みんなにずるいといはれました。それで又皆をつれてそこへ行つて見ますと、大きいはつたけが草の中にありましたのでとりました。皆でそこらへんをいつしようけんめいになつてほりますといつぱいありましたので大よろこびでみんなとつてしまひました。そしてゐる中にはきごにいつぱいになつたのでうちへかへりました。晩にはきのこじるをたべました。

◇

こげ御飯をだして

高二　高橋サキ

ゴト〳〵〳〵、ブー〳〵〳〵と御飯が煮え立つてゐる、私は漬物をだしてゐたが中々手離されない、雪子、雪子と妹をよんだが一向返事をしない。重い石をやつとのことでのせて大急ぎでふたをとつた、米はぐぼ〳〵と自由になつて愉快だといふ風にはね上つてゐたがそろそろ水がひけたのでふたをしたら、又もやふくれ上つたのでふたをとつたら一度に湯氣がぶーつと上つて勢よく私の手につきあたつた、思はず「あつ」と叫んだ拍子にふたが灰の中へおちた。その中に湯がひけてしまつた私はおとしたふたを水で洗つた、そのうちに御飯がみり〳〵〳〵とこげる音がする。

急いでさげようとして手をかけたが、アルミだからとてもあつい。何かもつものがないかと思つてあたりを見廻したが何もない。

その中に御飯はえんりよもなくこげる。今度は着物のはしでもつたがとてもあつい。でもやつとのことで御飯を下げた時にはもうこげくさい臭が室一ぱいに滿ちてゐた。

◇

朝

高一　小山田慶一

朝ふと目がさめた。僕の側にねむつてゐた弟が、夢を見てゐるのか、にやりと笑つてゐる。夜は靜かに明けてゆく。ほのぼのと東の空が白んで來た僕がむつくり起きて外へ出て見ると廣い〳〵お空に數知れぬお星がぴかぴかと光つてゐる。見てゐる間にだんだん星の數も少くなつて行く、もう其處此處にはとりの鳴き聲が聞えてくる。夜はすつかり明けて明るい朝となつた。

◇

とんぼとり

高二　鶴田千代吉

「久治」僕はよんだ
「先づ先づ」と小聲で
久治はこたへない
そつと手がのびた
とんぼは藁の上で
動かない
羽がいきなり光つた。

◇

月の夜

稗貫郡花城校

高一　高橋睦子

どこかで虫が歌つてます
月に浮れて
黒い夕顔の葉が踊つてま
す涼風に吹かれて
月は青白く照らしてゐま
す、皆の顔を
だまつてみんな月を見て
ます、虫が歌つてます。

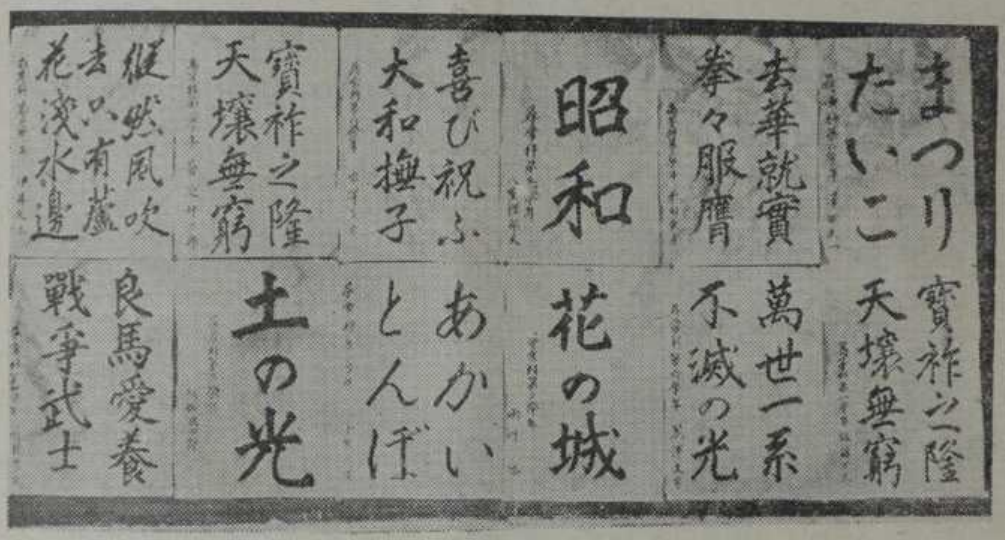
◇

飛行機

稗貫郡矢澤校

等三　鎌田善吉

毎日うなりを立てゝとんで來るあの飛行機はゆくわい、さうです。「今朝　朝學校に來る時一だい又も私はねてゐるうちに二だい、もりをかの方に行きました。」とねいさんは言ひました。



花城小學校秀才

見ました。その飛行機はずつと下つてまるで下つた時、私たちは花卷のグランドに下りるだらうと思つてゐると、どこのか人は「花卷に下りる所はないだ」。といつて行くものがあります。飛行機はやはりだん〳〵上りました。

學校にきたとき又南の方から一だいとんできました。お日樣に羽は光つてゐました。よく見れば、兩わきに二本のはたが、ありました。あれは北軍と南軍とわかれて、ゐるさうです。もう飛行機などはあきました。こんどはえんしゆうを見たいと思つてゐます。

◇

雀の子

稗貫郡矢澤校

等四　川村きぬ

此の間の夕方私が外であそんでゐますと姉さんが「ちよつと」とお呼びになつたので急いで行きますと姉さんはかはいゝ雀の子をだいていらつしやるのでした。私はその雀の子をふところに入れて暖めてやりました。雀の子は少しびつくりしたやうな顔付をしてゐましたがそれでもぢつとしてゐました。その晩は箱の中へきれを入れてその中にねかしました。

よく朝私が起きて見ますと雀の子はもうちやんと箱から出ておざしきをちよこ〳〵歩いてゐました。それから私は雀の子を肩にとまらせてお母さんの所へいけといつてはなしてやりました。私は雀の子のすがたが見えなくなるまで見送つてゐました

◇

私のぼうし

和賀郡立石校

等三　長洞良一

私のぼうしは二年生の秋のをはりに買つてもらつたのです、もう大へん色がさめて、ぐにや〳〵になつてゐますが、それでもがまんしてかぶつてゐます、お友だちがいゝぼ

うしをかぶつてるのを見ると、私はじぶんのへんなぼうしが、はづかしいやうな氣がします、けれども、私はこのぼうしが早くこはれてしまつて新らしいのを買つてもらいたいとは思つて居りません、すつかり、こはれてしまふまで、大切にしてかぶつてゐる氣です。

◇

秋の夕暮

和賀郡谷内校　尋五　淺沼文一

（一）

だん〳〵日が暮れはじめた。風も吹かないのに、寒さが身にこたへる。どこかで蟲の鳴く音がきこえる、すきとほつた良い聲だ。みねつゞきの山の上に、ふはりと一つの白雲が見えたかと、思ふともう山をはなれて、こつちへ飛んで來てゐる。一つ又一つと、だん〳〵多くなつて、自分の思ふまゝに飛びまはつて、一つの大きなかたまりが、三つにも、四つにも、分れてぶつかりさうになる程である。空には風が吹いてゐるのだらう。

（二）

コスモスの葉、豆の葉にさはつて見ると、ひやりと冷たい水のしづくが手にふれてぱら〳〵と落ちる。

だん〳〵あたりがうすぼんやりとなつてきた。星までも寒さうにぴか〳〵と青く光り出した。

遠くで水を汲むつるべの音がさびしさうに「キーキー」と細く聞える。寒い〳〵心さびしい夕暮れだ。

◇

試　問

和賀郡田瀬校　高二　菅原タカ

一時間目の鐘がなつた。私等の胸はかすかに鼓動がうち始めた。整列をし教室に入つた。皆は教科書をだしてすら〳〵と頁をめくつた。私もすいと本の方へ目を通した。本の中には知らない文句が幾度となく出たやうに思つた。間もなく階段がみしり〳〵と音がして菅原先生が入つてこられた。本をしまつてといふ先生の一言が更に胸の鼓動をたかめた。そして冷水を浴びせられた樣な氣がした。間もなく頭顔体があつくなつてきてひたへから冷い汗がぽたり〳〵と落ちて來た。

問題がだされた。私の知つてゐるのは一つもない皆はすらすら筆を動かしてゐる。私も一生懸命になつて黒板をにらみつけたが……

教室は水をうつたやうな靜かさである。もう一度黒板をにらんだ時は黒板はかすんでゐた、それと同時に胸の鼓動が猶更はげしくなつた。

◇

さむくなつたこと

和賀郡土澤校　尋二　菊池良治

もう、さむくなつてきました。私のうちには、きくの花がさきはじめました。小さなつぼみがたくさんついてゐます。このつぼみがひらくと、赤いのや、きいろなのや、白いのや、さまざまな花がおにはいつぱいにならんで大へんきれいです。白い花がさいたら、明治節に學校の式にもつて行かうと、思つてゐます。

◇

夕　方

和賀郡土澤校　尋五　阿部アサ

すゝきが白いよ、ゆれてゆれて白いよ。

また虫が鳴くよ、くすの木のかげだよ。

はつぱが光るよ、ぬれてぬれて光るよ。

◇

秋の野原

和賀郡土澤校　尋四　平野次男

秋の野原は
　美しい
黄色い葉つぱの
　着物きて
風に吹かれて
　動いてる

◇

きゆうびうさん

稗貫郡花卷校　尋四　八木すげ

昨日小間物屋からきゆうびうさんを二つ買ひました。まるはだかなので、ねえさんにりゝあんでぽうしとふくをあんでいたゞいて着せました。

私のきゆうびうさんは一寸ぼうし位の大いさですが、顔もからだも丸々太つて目はぱつちり、それはかはいらしうございます。とがつた頭にぼうしをかぶせ、太つたからだに小さなふくを着せた所は、又一そうかはいらしく見せます。

京ちやんとりつ子に一つづつかした所はよろこんで持つてあそびました。私はどうしてもくれてしまふことは出來ませんでした。

◇

小さなパン賣り

稗貫郡花卷校　森澤シズ　尋六

日の暮れかゝる頃私は弟を負つて停車場に遊びに行つた。

其處にはかあいゝ七才ばかりのロシヤ人と其の子の兄らしい人とが二人で「をぢちやんアンパン買つて下さい」。と云ひながら待合でアンパンを賣つて居た。やがて兄らしい人がみんな賣つてしまつたが小さい人のパンは一向賣れないつて目に一ぱい涙を浮べて「をぢちやんアンパン買つて頂戴」と小さな聲で云つてるが誰も買つてくれる人がない。私はその樣子があまりいぢらしかつたので賣らないとお母さんに叱られるのと聞くと「叱られる」と泣きさうな聲で答へた。

さうしてる中に向の方からお巡さんが來た。「賣れないでそんなにうろ〳〵してるのかい、こんなアンパン買ふ人がないんださつさと家に歸れ」「明日からは此處に來てはならないぞ」と叱るやうに言ひ去つた。

アンパンは澤山殘つて居るし、五時の汽車にも遲れ、日もとつぷり暮れてあたりは如何にも靜かになつた。

しかしロシヤ人二人は夕日を浴びていつまでもぼんやり立つた居た。

◇

青い柿

稗貫郡花卷校　牛崎トモ　尋五

お隣りの柿が熟しはじめました。

今年は柿のあたり年で、枝が折れるほどなつてをります。

赤く熟したのはじまんさうになつてゐます。わたし達の手のとどきさうな處に小さい青い柿が一つ見えます。

學校ではそんなでもないがお家へ歸ればきかなくなる正三さんが、長靴をはいて色の黒い顏にいつもの大きい目をくり〳〵させながら出て來た。

とう〳〵やつばしわたしの思つてた通り柿のそばによつた。けれどもみな高い木の上になつてますので、殘念さうに見てゐましたがこの青い柿をみつけてしまつた。手をのばしつまたてしてその青い柿をぽちりとつたそうら今食べるぞと見てゐると一寸なでゝ一口ガチリかじつた、とあの顏をしかめてスペットはき出した。

食ひかけの柿をみつめてたがせきになげつけた。せきの水は昨夜からの雨で真黑にもや〳〵にごつてる。

投けられた柿はひとりでどぶの中でなげいてゐる事でせう。

◇

運動會

稗貫郡花卷校　鎌田フク　尋三

ぶかぶかどんどん
うんどうくわい
ねこのたいきやく
あつはは
みんなのゆうぎ
おもしろや
みんなのだんす
おもしろや
ゆうぎだんす
いさましや
ぶかぶかどんどん
うんどうくわい

◇

秋のえんしう

碑貫郡花卷校　猫塚善德　尋三

秋のえんしうおもしろい
空にはひかうき
りくには兵隊いさましい
鐵ぽうどん〳〵
やほうもどーん〳〵
秋のえんしうおもしろい

かへつてみれば　古川安忠

かへつてみれば
仲よしの
果もの店が
なくなつた。
どうして店を
やめたのか
小母さん居ないで
寂しいな。

みやげ買はずに
ぼんやりと
バスケットさげて
立つてゐた。

すすき

和賀郡土澤校　平野定男　尋六

沼のそばの
すゝき。
ほをたれてゐる。
根本の泥の中で
かへるが一匹
じつと

青い空を
ながめてる。

◇

或日

和賀郡土澤校
尋六　小原寛

朝から、しょぼ〳〵と降り出した雨はまだ止まない。

僕は机によりかゝつて、ぼんやりと五月雨の降るのを見てゐた。表では學校かへりの三四年の女生徒が雨にぬれねずみになつて行く。その時あちらこちらから大人の聲がきこえる「せきがやぶれたぢや」するとあちらの方から雨笠やけらをきて、「たへんだ、たへだ」。といつてかけて行く。僕は長靴をはいて傘をさして家を出ようとした。すると家の方から「どごさ行ぐとごだれや」と母のこゑがきこえる、僕は「や」といつたきりでかけ出した。すると、となりのまさちやんが大きな下駄をはいて傘もさゝずにやつて來る。僕は「どごさ行ぐどこだべ」。といつたら「あそごさ」といつて、せきの方をゆびさした。僕は「えがねえだ」といつて、せきに行つて見たらまるで濁水が、せきをこして流れてゐる。上手の方では人が黒山のやうに集つてゐる。僕はそれを見に行かうと思つてかけだすと今水の上にたづうかんで流れやうとする橋をわたらうとするまさちやん！。僕は行かうとすれども行かれない。その中にまさちやんが一足あるいた。「あつ!!」と叫んで僕は「ジャブン」と飛び込んだ。僕はなにがなんだかわからない。たゞまさちやんを手にだいたのがわかる。身にかんじるつめたさ。まさちやんは大きな聲でないた。僕は堰ぶちの草などにつかまつて上つたまさちやんはまだ泣いてゐる。僕はだき上げてまさちやんの家につれて行つた。家の中にはいつて行つて「まさちやんがせきさはいつてゐだつた」。といつた。すると家の中にはたらいてゐる人々は皆僕の方をむいた。僕は口をもぐ〳〵しながらかへらうとした。すると「ありがと」といつて僕をひつぱつた。「いを(いゝです)」といつてまさちやんの家を出た。着物からは水がぽたりぽたりとたれる。急に長靴がおもくなつたやうにかんずる。着物をよごして家の前に行つたが、はいれさうもない。たゞ母のおつた顔が目の前に見える。そしてしと〳〵降る雨が、僕が「家にはいるんだ」。と言つてゐるや

土澤小學校作品

うな氣がするすると女中が「家さおへえれんせ」。とずるけていつた。

僕はそれにたいして笑ふ氣にもなれない。又家の中の方から母がわらつて「はいれ」とやさしく言つた。僕は下の方を向いて家にはいつた。すると母が「これやまさちやんのおがさん（小母さん）からももらつたぢや」。カステラを二本出した。僕はそのかすてらをふところに入れて二階に上つた。

今、母がまさちやんを堰からあげたことを知つてゐるだらうかなどと思ひながら着物をとりかへた

◇

僕の馬ひやし

稗貫郡八幡校

尋五　高橋庄四郎

僕は此の頃馬をひやせるやうになつてきた。

口わをつけるとき馬は僕をからかつてわざと頭を僕のとどかない所へやるが、僕は縄をたどつてやう〳〵馬の口をおさへ口わをつける。それから外へ引き出して手づなを兩方の口のわきにゆはえつけ、馬のくびを縄と縄との間に入れて手づなの端へ足をかけて乗る僕は小さいのでこれはなか〳〵容易でない。そのうちに馬は家の後の方へ行かうとするので手づなをまはして門口から出て行く。途中所々で草をたべようとするが、手づなを引きしめて歩かせる。

川へ行くには少し坂がある。その坂を下りきると川ぞある。

川の上へ上り馬の足が半分程かくれる所まで行つて五分位川の中に居つて歸る。歸トには走りようとするので少しはしらせる。

◇

小さなかめ

稗貫郡八幡校

尋四　田中律子

私の家では小さなかめをうらのせきの中に、針金でつないでおきます。毎日學校からかへると、かめを見ます。おさらひをしてから、又いつて見ます。昨日おひるすぎに、ゆり子さんがあそびにきましたので、お手玉でそんでをりましたが、止めてかめを見にいきました。私はかめの頭の上に指をやると、頭をひつこめてしまひました。手をとると、へびのやうな頭を長く出しました。こんどはゆり子さんがすると又ひつこんでしまひました。あまりおもしろいので、むちゆうになつて、をかにあげたり、せきに入れたり、日のくれるのもわすれてかめとあそびました。私はかめはほんとうに、かあいえくてなりません。

◇

秋の月夜

稗貫郡八幡校

高一　鎌田みよ

非常によい月なので姉さんと私と散歩に出た。すみ渡つた空には、きれいな月が出て弱い光を地上になげつけて居る。時々、はだ寒い風は私達を吹きつけては向ふの林を騒がす。

今最後の營みに余念ない栗の木もやがて間近い中に葉一枚ない枯木となるであらう。つかれきつた足もとの草は弱い月の光りに照らされつゝ、秋のかなしさを物語つて居る清い空氣を破つて、かすかに聞ゆる尺八の音も本當にあはれである。

私と姉さんはお空に向つて菅公の唱歌を繰返した何邊も繰返した。

あゝ此の月が昔氣紫へ流された菅原道眞公を照らした月であらう。

又ベートーベンは月光の曲をひいた時に窓からさしこんだ光も此の月の光であつたであらう。」と感慨無量であつた。

◇

くりひろひ

和賀郡小山田校

尋二　伊藤ケイ

私はまい朝はやくおきてくりひろひをします。おばあさんは大きなはきごへひろひます。私は小さなはきごへひろひます。からからとなんぼもおちるからひろつても、ひろつても、まだあります。風の吹くときは、すぐはきごへいつぱいになります。

◇

大エンシユウ

稗貫郡南城校

尋二　伊藤ハナ

大エンシユウヲ見ニオカアサントワタクシトアカンボモイキマシタ。デンシヤノアルクセンロヲコエテズツト北ヘイキマシタ。ソシテイシヤバノソバマデイキマシタ　ヘイタイサンガタクサンハセテキマス。セキノソバデ見テキマスト白ノヘ

イタイサンガ四人キマシタ。テツボウカツイデ草ヲシヨツタ人モ來マシタ
アカハ二十人バカリキテ火ヲダシマシタ。サウシタレバミンナハビツクリシテ見テヰマシタ。
ドドドドドドトナツテワタクシモビツクリシマシタ。

◇

御明神樣の四季

稗貫郡南城校

等四　神山喜八

私の内から東の方一町半ぐらゐだと思ふ所に明神樣のお社があります私は時々そこに行つて遊びます春は櫻や梅が咲いてきれいであります又社の後にある杉の木は綠色の若芽を出し美しくなります夏は直ぐ下を流れてゐる北上川で水泳ぎをするのが見えますあたりは青々と草木はしげりお社の前の湧水がドン〳〵と涼しさうに流れてなんともいはれないよい氣持であります

これからは北上の紅葉の山を遠くながめることができます私は寫生をする度に枯草の上にすはりこんで虫の聲を聞きながら見とれるのです冬になるとそこら一面眞白になりお社の杉の木が綿の着物を着て寒さうに見えます雪のつもつた赤い鳥居に鳥が二三羽止まり北上のつめたい流をみつめて何かえさをほしさうにしてゐる姿も見えますなんといつても冬は一番さびしいのです冬になるといつも早く樂しい春をまつばかりです。

◇

大演習を觀る

和賀郡小山田校

高二　一ノ倉彌六

勇ましいひゞきをあたへ空の勇士と言はれる飛行機を見るごとに、益々興味多い演習の想像はとめどなく湧き起る。待ち遠し五日の日もとつぷりと暮れはて、あたりも次第に暗くなつて行く。はるかに望む、花卷の空も、興味と共に起る憂の雲が漂ふてゐた。ボーと起る汽笛の音、はるか山をぬつて聞ゆるふくらうの鳴聲、實に淋しい夜となつてしまつた。

空には星一つなく次第々々に黑雲におほはれ、僕は唯ぼうぜんとして見とれて居た。樂しい夕飯も濟み、明日の準備に取りかゝり、萬事整へ樂しい床につく。

けたゝましいねづみの音におどかされ、ねむい目をこすり、つまづきさうな足を引きづり〳〵仕たくに取りかゝる。邊はまるで靜かで眞夜中のやうに感じた。突然邊の靜かさをやぶつて、コケコッコーと雞の聲、同時にざわ〳〵と雨の音、あゝ殘念だな今日の喜ぶべき遠足も、……と思ふ瞬間、後から〳〵と考へ起るうれしさもすべて悲しみと化し、憎むべき雨の音を聞くにつけ、僕等の遠足に對して幸をあたへてくれぬ神々に對しては、憤らずには居られなかつた時やうやく過ぎて時計も四時半をうたうとして居る。

急ぎ仕たくをし家の門を後にした。近所の家も樂しいねむりについて居るのか、音一つなくほの暗い外燈を見る度になんとなくさびしさを感じた。

◇

赤とんぼ

和賀郡田瀨校

等四　朝倉豊子

私が夕方勉强をしてからなんのきもなく、うらへでゝゐましたら、赤い着物を身につけた、とんぼがとんできて、私のひざの上に、そつととまりました。その時私は赤とんぼにいひましたのゝなぜいつも赤いべゝばかり着てますの、」と……

でもとんぼはなんともいひませんでした。そしてたゞ、赤いおべゝをばた〳〵してゐるのでした。

◇

農家

和賀郡田瀨校

高二　朝倉門十郎

樂しい農家の運がまはつて來た。春の雪の消え時より手入をして待ちに待つてゐた農家の取入時が來た。もう稻刈もはじまつた。稻の穗は頭を地に伏す。晝は太陽は拜す。夜は月早く出でゝ照らす農家の人々を喜ばせようと思つて刈取られるのを待つてゐる。農家の者は喜んで秋を迎へた。村のお祭も早や過ぎた。喜びの叫びは天地にあふれてゐる。我等はこの爲にこそ樂しい月日を送つてゐるのだ。

故に我等は勉强に力をつくして立派なる人間とならなければならない。父

母の恩に報ひなければならない。今から後は愈々農夫となつて働かなければならない。

稀なる村の實のり農家の者はどんなにか喜んでゐるだらう。農家の子供等もおあしを貰つて喜んで店に買物に行く。

をぢさんのすんで居るうみべの町のかいすいよくの小屋も、もうかたづけられて、うみにおよぎに出る人のすがたも、まばらになつたと、をぢさんの手紙に書いてありました。さう言へば氣のせゐか、空もなんとなくすみたのしい遠足も、待たれたことの一つです。

童謡集『豆の兄弟』

土澤校で發刊

土澤小學校では、今回童謡集『豆の兄弟』を發刊作たが、これは同校六年兒童の、尋四時代からの作品を集めたもので百篇百頁のもので、兒童の新鮮なる純情がみち溢れてゐる。小學校の綴方科の鑑賞教材としても、好適のものであらう。一部實費參拾五錢の由、希望の向きは、土澤小學校内高橋芳水氏宛申込まれたしと。

◇

秋

和賀郡小山田校

尋三　伊藤ナツノ

（一）

晝の間まだあせがでて、暑いと思ひますが、朝晩何となくからだに寒さがしみわたるやうです。

渡つて。

（二）

さわやかな氣分が、天にも、地にも、みち、みちてゐるやうです。せどの柿のみの、赤く色づくのも家で栗ひろひするのもう遠くないことだと思ひます。

時報

△去る十月廿八日（日曜）午前九時より花城小學校に於て、同校尋常一學年生及花卷幼稚園生の母の會例會を開いたが、先づ其の實地授業を參觀し終つて例會に移り三田花城校長の訓話及各受持訓導の感想あり、次いで學校側と母の會側との打寛いでの懇談があつた。

◇

△和賀郡土澤及安俵小學校では去る十月卅日秋季大運動會を開き何れ盛況を極めた。

本社賛助員芳名

稗貫郡

花城小學校長　三田憲

花卷同　藤岡悦郎
大迫同　菅原隆太郎
内川目同　藤原濱治
外川目同　鎌田佐代治
亀ヶ森同　岩舘正一
宮野目同　遠藤祿郎
好地同　金子昌一
湯口同　谷藤源吉
矢澤同　鬼柳茂太郎
八重畑同　八重樫達郎
新堀同　齋藤忠兵衛
太田同　伊藤源吉
八幡同　玉山倉吉
湯本同　押切恭次
上中同　晴山吉郎
南城同　照井眞臣乳
寶閑同　櫻羽場秀三
大瀬川同　佐藤小次郎
八日市同　佐々木乙吉

和賀郡

黒澤尻小學校長　小笠原政一
土澤同　佐々木俊隨
横川目同　福地文敬
江釣子同　吉田豐
笹間同　小田島忠太郎
新町同　小川末治
川尻同　及川幸吉
二子同　阿部久藏
更木同　高橋榮治
中内同　及川秀幸
谷内同　多田倉次郎
田瀬同　下坂耕平
小山田同　及川善八
輕井澤同　多田節郎
鬼柳同　猫塚三左衛門
飯豐同　伊藤良三郎
立花同　大平恒郎
藤根同　小原彌右衛門
岩崎同　古川萬次郎
猿橋同　小川三郎
川舟同　石川苞
滑田同　菊池己代治
成田同　小原澄美
南成島同　小原啓吾
倉澤同　長谷川慧明
立石同　佐々木清人
東晴山同　伊藤靜男

本社々員

金澤秀次
赤坂庄三郎
金澤庄一
菊池義三

週刊　子供の力社

花卷川口町

編輯室から

△愈々創刊號を發行することが出來ました。諸先生、父兄、生徒方並に有志諸賢の深い〳〵御同情と御援助のたまものと厚く御禮を申上げて置きます。

△何せ始めての事業で、何かに不行屆なもんですから果して皆樣の御期待に添ふかどうか心配であります。どうぞ皆さんの腹一ぱいな御批評と御指導と御注文を與へて下さい。

△今回の編輯で最も遺憾と思つたことは次の事柄であります。

△体裁の方らか▽

△カットの不足—注文品未着

△寫眞の不足—手の不足

△中みの方から△

△讀物の不足

△先生方及保護者の記事の不足

本紙代表者の挨拶や有志諸賢の祝詞が多かつたゝめ、紙幅をせばめられたからであります。

△生徒の作品に就き、選評を行はなかつたこと、

選者との交渉がおくれて間に合はなかつたからです。

今後はこれが充實に努めます。

□次號からの計劃

△諸講座の開設

運動方面

衛生方面

作品方面(綴方、童謠、詩、歌等)

辯論方面

△懸　賞

兒童作品は毎號

△考へ物

□寄稿は發行期日の十日前に本社に到達する樣に御發送を願ひます。

□最後に本號に掲載にならぬ寄稿者諸氏に御詫申上げますが今回の寄稿は案外多く集り本號に載せかねたのでやむをえず、到着順に載せたのですから何分御諒察を願ひます。次號にはきつと載せます。

(赤坂生)

兒童作品懸賞募集

第二號の懸賞募集を致しますから皆さん振つて寄稿して下さい

◇注　意◇

△作品は綴方、童謠、短歌、俳句。

△入賞者には賞品を贈呈します。

△締切は十一月十四日。

△用紙はなんでもよろしいが字詰は十一字にして下さい。

△學校名、年級、氏名は是非記入して下さい。

△宛名は花卷川口町『子供の力社。』

◆…本號に限り七錢…◆

本紙定價一部四錢

毎週土曜日發行

昭和三年十月三十日印刷納本

昭和三年十一月三日發行

花卷川口町四四三

發行兼編輯人 金澤秀次

盛岡市紺屋町三九

印刷人 石川安藏

盛岡市紺屋町三九

印刷所 杜陵印刷所

花卷川口町四四三

發行所 子供の力社

藏吉